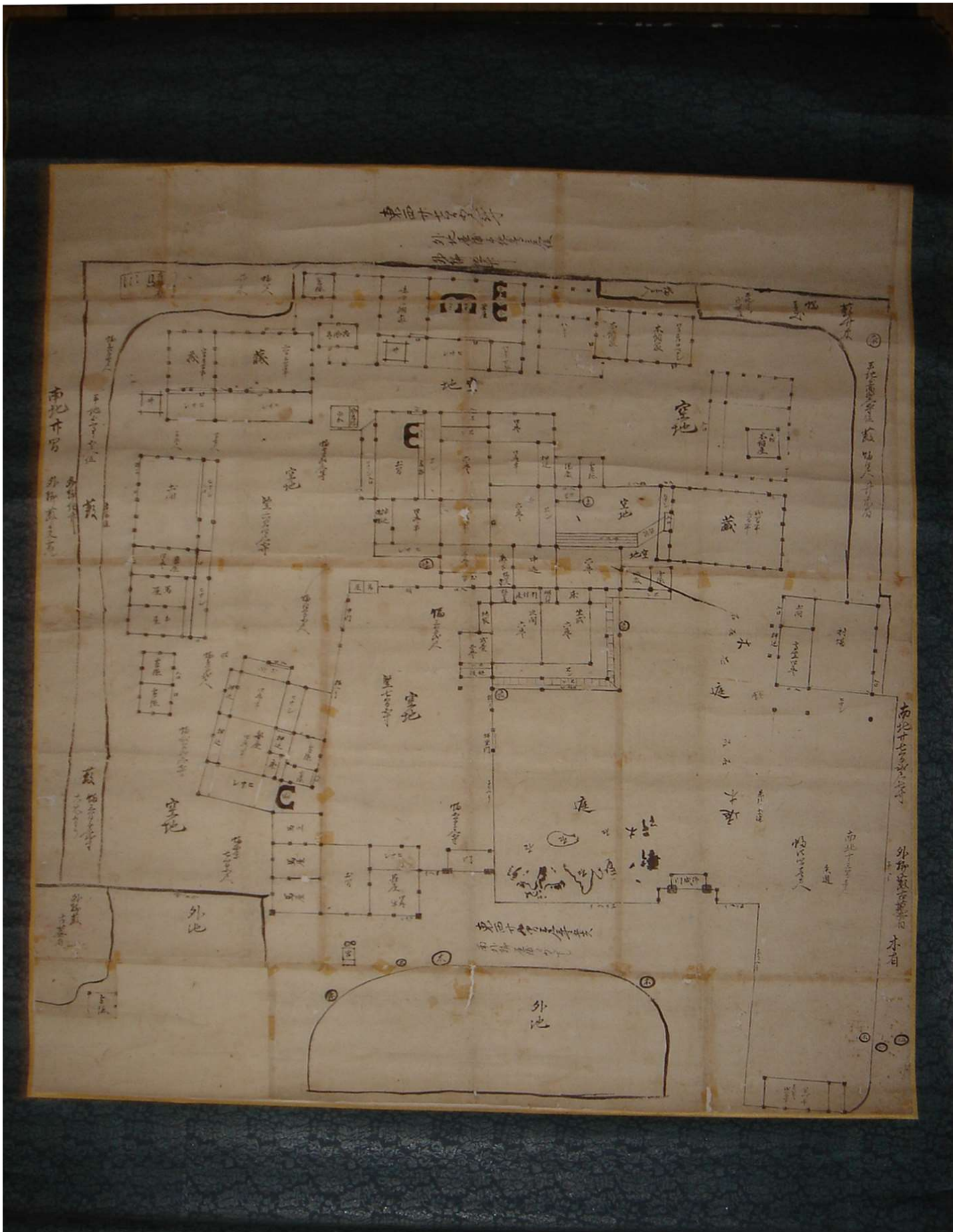


絵図の

原図



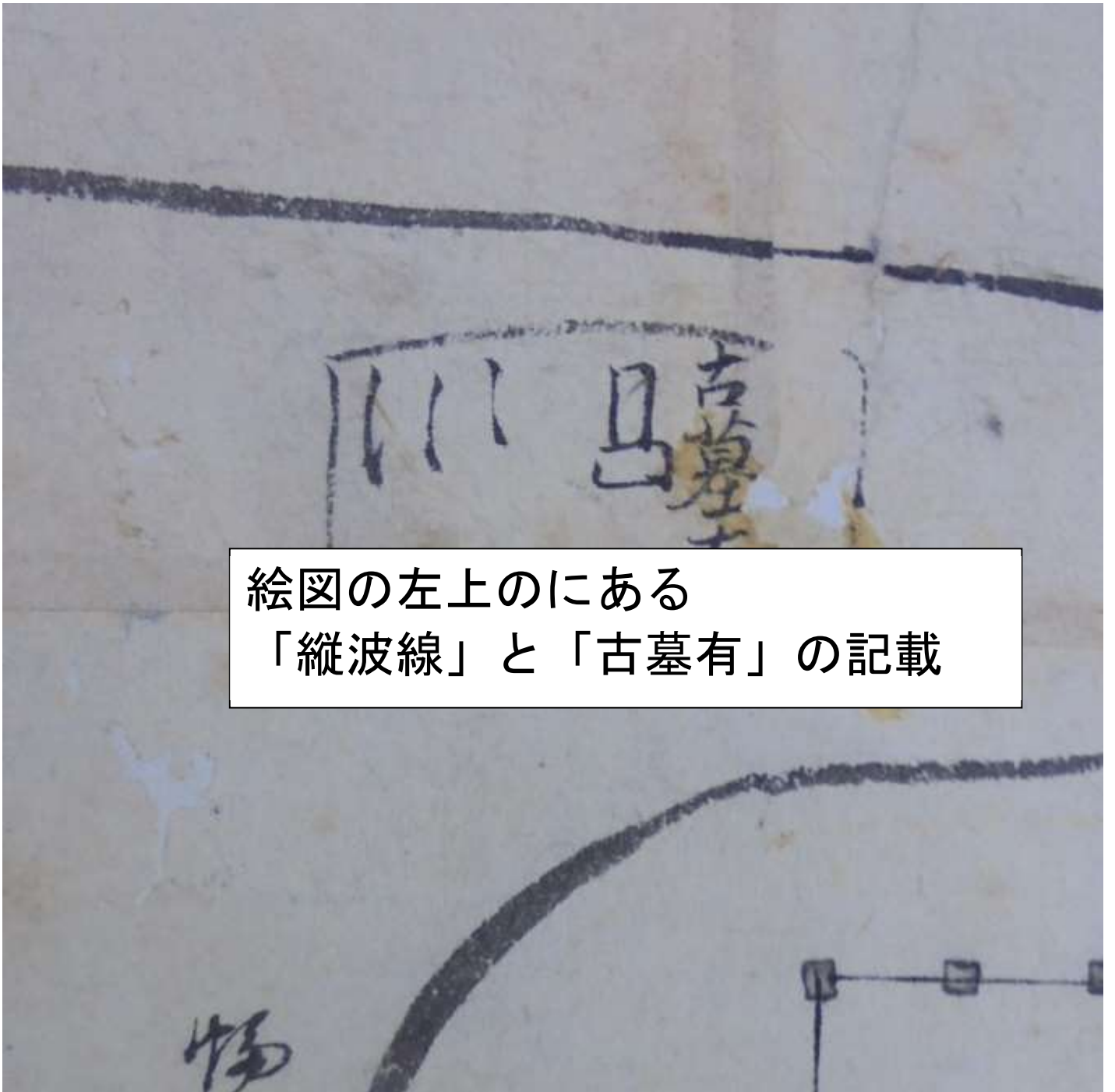
絵図を読み解く

絵図は明治二十年頃の作で江戸末期の建物など宅地の状況を示しています。この絵図は重要文化財の付属指定です。解体工事の調査で江戸末期建物構成と絵図が異なる箇所があることが判明しました。明治での活発的なリフォームを示しています。道具蔵の展示場に置いた絵図（活字化）にそれを記載しています。公開日にご覧下さい。

絵図の左上に下の図が描かれています。三本の縦波線は意味不明ですが、この場所に石グロと線刻地蔵・線刻観音が置かれています。置かれた場所は二メートルを超える石積の上です。石垣は西側を廻り、下に溝が築かれ、宅地の外に続いています。

絵図に古墓有と書かれています。名が刻まれる墓が造られるのは、寛永時代を境にしているようで、それまでは埋葬した箇所に線刻地蔵を置いていたようです。

次項の「銭函と明和八年の移住」の記載から移住した地は現在と同じように安岡の土地となり、埋葬された人は安岡の先祖と考えます。時期から慶長五年に山北に移り住んだ喜三郎夫婦の埋葬場所となります。石垣、溝などを築き、現在の家の在所を開拓・整備したのです。



絵図の左上のにある
「縦波線」と「古墓有」の記載

銭函と明和八年の移住

銭函の蓋の裏に次の墨書があります。

明和八辛卯五月十八日家建大工兎田村清助作

函には寛永通宝が収容されていたので銭函と呼称しています。中に入ったのは形は多種多様ですが、寛永通宝で二千四百四十八枚ありました。

墨書に家建とあります。何を建てたのでしょうか。家系圖に「明和八年辛卯五月四日 四坊池ノ上江別住・」とあります。この二つの日付を並べると、住居が住める状態となり移り住み、十四日後に住居が竣工したと推測します。「四坊池ノ上江別住」とあるので住居の前に池があったのです。明治の地券などで西門の前には池があったことは確認されています。

前項の「絵図を読み解く」に記載した溝が廻って宅地の外に流れ出ていると場所と池の位置が一致します。

米蔵の柱には「山北村大工 利八 新宮村 清介 卯九月十一日□□」とあります。住居を現在の座敷部の位置に建て、十二年後の天明三年に住居の前に米蔵を建てたのです。

